

# PAM通信 コラム

2010年4月発行

## <第37回>むきふむきってありますか？

今回のコラムは、PAMでヘルパーとして働くNさんをお願いして書いてもらいました。

どのような人がヘルパーに向いているのか、ふと想うことがある。正直、ピタリと当てはまる人物像を上手く思い浮かべることが出来ない。だが、ときおり他のヘルパーが利用者さんと過ごしているのを見かけることがあり、何となく自然な形で皆、利用者さんの時間に馴染んでいるように感じられて羨ましく思うことはある。あるいは、もしかすると自分も他のヘルパーから見れば同様に馴染んでいると見られているのかも知れないが。

なぜ、私がそのようなことを気にするのかと言えば私の、日頃の生活の姿があまりにもだらしなく、いわゆるヘルパー向きの性格ではないような気がするからだ。例えば休日の私の行動は私自身にもどうなるのかよく分からない。明け方に目覚めてマックで新聞を読んでいるうちに記事に載っていた温泉や芝居に行く事もあれば、夕暮れに目覚めて今日は寒いな、などと呟きつつ新宿に呑みに行く事もある。起床時間はバラバラだし、食事時間も適当で、三食のときもあれば一食のみの日もある。呑みに行けば終電を逃し歩いて帰ったり、季節が良ければ屋外で寝る事も(たまには)ある。恐らく休日の私には「時間」という概念と年齢相応の分別がまるで欠落しているのだろうと思う。

そんな私生活であるから利用者さんに対して、これがノーマルな生活です、などと切り切る事などとても私には出来ない。たとえ、どのようなアブノーマルな形であろうと家の中では本質的に人は自由な暮らしを楽しむ権利があると思う。社会常識は重んじなければならないが、世間の大きな常識とは別の、個人的に作り上げた常識、ささやかな文化が誰にでもあるはずだ。ヘルパーの関わり方は利用者さんの身体的、家事的な目に見える援助ばかりでなく目には見えない生活様式と言うと硬いが、その家で利用者さんが作り上げた時間のリズムの中に出来るだけ相互のストレスなく入って行けるか、という皮膚感覚を持つことも必要なことではないかと思う。

人は私生活では自分が思っている程に理性的では無く、案外とそのときの気分で動いていることも多い。ヘルパーはそんな人間の意識的な行為と無意識的な行為の狭間の心の揺らぎの中で働いており、そうした人間の心の揺らぎを楽しめることが、もし、この仕事に向き不向きがあるとすれば案外と大切な分かれ目の一つとなるのかもかもしれない。

(ヘルパーN)

「はなびら」と点字をなぞる ああ、これは桜の可能性が大きい

笹井宏之歌集「ひとさらい」より

如何でしたか？ 私には持ち得ないヘルパーの視点からの意見なので、“賛同します”以上のことを言う資格を私が持つとは思えないのですが、あえて「素敵な考え方だと思います」、「最後に詩の一遍を付けるなんてお洒落な演出です？」と言わせていただきます。

あなたは、自分の立場から、この文章をどう読まれましたか？